911.168
T.94
2

911.168-Ta94-2v
1200500755786

911.168
PA94
2

彩

歌集

館山一子著

八雲書林刊

昭和六年五月
帝國大學

915
205

自序

歌に志すとは言つても、私の場合はただ、三十一文字を基本とするこの短歌といふ一つの表現形式をかりて、日頃自分の心に去來する感情を、ありのままの相(すがた)に於て捉へ、描き出したに過ぎない。私と短歌との關係はただそれだけである。しかし私は、この關係に於て、短歌といふものを限りなく愛するのである。

こんな事を言つたら、人或ひは私を生意氣なことをいふ女だとわらふかも知れないが、私は永い間、歌に、小説的意義を附與すべきことを念願しながら作歌をつづけて來た。そして近來に至つては、藝術としての短歌の將來性と、短歌作者の運命といふことについて考へることが多くなつてゐる。

それ故私のこの歌集には、さうした傾向を持ち、さうした事柄に取材した作品が、相當數多く現れてゐることと思ふ。それが自然であるし、そしてこれらが、他とは異つた特色の一つといへば言へるのかも知れないと思つて

ゐる。

先達も、ある身近かの一人から「歌集を出すなら、眞にその人自身の息吹きにふれるやうなものを出して欲しい」と言はれた。私自身ももとよりそのつもりではあるが、しかしそれが、果たしてどの程度に具現されてゐるかは、この歌集が、人々の手にわたつてから後に、はじめて判然することである。

この意味からと、出版書肆の好意ある企に對して迷惑をかけたくないといふ氣持から、私はこの本が一冊でも多く人々の手にわたることを、祈るのである。

彩目次

第一部

幻……五
彩……七
刻……一〇
戰時……一二
白き牙……一三

朝の疊……二五
深夜の月……二七
冬を生きつつ……二九
朝雀……三三
六義園歌會……三五
一時期……三七
歌に執す……四八
衝撃……五二
波動……五五
時事に寄す……五九

栗のいが……六九
秋……七二
雜……七五
在り樣わびし……八二
事務室にて……八四
杏かに闘ふ……八六
人々……八八
春やいづこ……九二
庭前雨情……九四
白晝夢……九六

暁雨……一〇一
夜蟬……一〇四
柵……一〇七
動向……一〇九

第二部

歸省……一一三
葉山にて……一一七
雜一……一二〇
結婚前後……一二五

震災の歌……一二九
早春……一三九
春……一四一
初夏……一四三
眞夏の頃……一四六
飼猫の死……一四九
雜二……一五二
憧憬……一六〇
心沈める頃……一六二
亡祖父を憶ふ……一六五

歌集　彩

雜三……一六八
雜四……一七五
無題……一八一
後記……一九一

第一部

幻

地の上の歡喜といふもあきたらず息つめておも
ふ夢のかなしさ
天馳るわが心かもあはれなる夜の夢にして人と
見えつ

幻影よしばし絶えしが甦り來て霜深き夜の胸に
こだます

臆してはまたあひがたみしばしばも夢に見るわ
が幻影とゐぬ

かくもしふねく夢に見えくるをおもひみぬ知ら
れず知らぬ一生のさまを

彩

ぬけぬけとあるを念じていつよりか隣人らが辛
氣くさかり

蕗のたう花とたけたる朝庭にふとしも眼見ひら
きにけり

思ひはやまぼろしなせど魂をたかく掲げて身じ
ろがざらむ

かい抱く虚空のみにしてわが日々のさびしき極
みに今朝は眼を据う

華々しく悪をば積みてたじろがぬ勇者の類か荒
く世に立つ

おのづから悪を伴ふふるまひの彩に充ちつつ眼
をみはらしむ

その持てる心の生肌に彩にしも惹かれしわれと
眼をみはるなり

刻

刻の歩み速かなるに壓されつつ
やもの讀みいそぐ
ひとりなるわれ
のたうてるわが心かも暗黑の小床の上に眼はあ
きながら

醉ひ痴れて常あるわれの後より刻の歩みの小止
みなきさま
魂の根を下ろしがたきこの地にしてなほ堪へる
餘地のありと思へり
思ひあぐねわがある時に浮びくる想念さへや過
去のものなり

戰時

大いなる時代の動きに搖られてや心常ならず業
にしよれり

世の動向のかへるを待ちて言はむことやうやく
多し菊咲く日頃を

時代下の白鳥を思ひひそかにもわが據るところ
固くありけり

おつちよこなりと人を罵れる犀星が誠實を見た
り銃後の一日

地這ふ樹のかたき根ざしに心惹かれ銃後笑はぬ
中の一人なり

漬物屋の前にしてふとききとめし歎きはわれに
そのまま殘れり

八百屋につぎ肉屋の征けば乾物屋帳簿の整理急
がむとする

このわれの胸にひびきてきこえけり思ひ切つた
る人の言葉の

もの言ひのふしぶしにちらとのぞかする新聞業
者は甲羅を經たり

一個の骨甕となりて歸り來し寫眞を人ら掲げ來
たるも

幾片の白骨と化して戻り來し骨甕を人ら捧げ來
たるも

骨片と化しし肉親を抱きつつ人垣の中を行くは
憂からむ

汗あえて戰ふ同胞らを心に持ち屈る思ひに晝寢
より覺む

ばんざいの聲に送られて征きし人歸りかへらず
夏たけにけり

燈火管制の一夜あさくさにて映畫「土と兵隊」を觀る。

燈を消して障るものなき秋月夜かうかうと照る
街路を行きたり

砲煙の立ちこむる刹那くづれ伏すや屍となりし
兵を見おくる

肉刺の中に蹠ありといふ警句をばつひにし洩ら
すのぞき見につつ

本分を守りて曠野に死なむとすわが在り方に翳
さす今を

われとして心溫めつつ行くべかり夜の街歩めさ
すらふならず

あさくさの群衆の中にわれもゐてあらぬ方へと
馳せたり思ひを

酔ひがたき壯絶にして映寫幕そのや一角に黒煙
あがる

死場所も死態も知らず今日ありて人が相撲つさ
まに息をのむ

汪精衛のゆつたりとたてる立姿一つのこりて歸
るさにあり

白き牙

盗人の瞳といふものを見たりけり悲しかりしかば言にはいはず

一つ鍵掌にのこりしを永遠のやすらぎの證とぞ見るわれは

わが負へる悪名にすがり身の周囲いたちのごとく嗅ぎまはるもの

追ひすがり追ひ來るものに振り向かず歩みおそきをひた歎くなり

白き牙瞼に描く夜夜の萎えしぼむことはたやすきごとし

われをやぶる勁きもののあらばやぶられむ魂ゆ
らぐあけくれぞ憂き

朝の疊

立ちまよふもののけはひのあやしくも心搏つな
り暗き翳さし

梅の花にほふ傍らの小火鉢に炭つぎ添へてうつ
むくわれは

自らの心音にしも聽かむとし炭火によれば身の
重たさよ

おのづから心ゆるみて呆然と疊には坐つ見上げ
し時計

心ゆるみうち萎えつつ火によれば朝の疊かわれ
を支ふる

深夜の月

月光の明るき窓べかへりみて立ちどまりたれつ
ひに寄りつつ

しみじみと見あげてあるは月ながら心のたけを
われは捧げぬ

笹鳴りの音の高所よりつたはりて月に思ひの沁
み入るごとし

わが心かすめて通る人影や深夜の月をみつめ飽
かなく

冬を生きつつ

めざむるや直ちにわれに問ふ心應へはなくて幾
とせか過ぐ

冬に入りてあはれにやせしわが體しごと緒につ
く追もなしに

この日ごろきざす思ひのもの暗くたよりなきに
ぞひとり息づく

このままに消えてしまはむ炭火かとのぞき見て
はただに團扇をうごかす

ひたすらに地をばみつめてわれはあり明日とも
ならば展く思ひか

ここに見るわれは瓦か石塊か息の通へる人間か
とまどふ

心をしいかに整さむうちにのみ向けてくらすも
ゆるされがたきに

思ふさま伸ばさむとして伸ばし得ずうちなるわ
れの心はまよふ

死に去らば空なるものをむせるごとき愛憎のい
きさつにまたたくわれは

この器こはれやすると氣をつかふ何につながる
わが心かも

朝雀

朝雀さへづる空に電車ひびき隣り水屋に洗濯の
音

その形龍のごとしと思ひつつわが見るへちま棚
をしまけり

一連のわびしさはかなき朝々のわれの寢ざめに、
訪ひ來るあはれ

伸びはやき草の茂りやたまたまに佇ちし窓べに
われ眼をみはる

六義園歌會

友らみな詠歌につとめ庭に俯す眼の前にしてわ
れの佇む

たまたまに心放ちて見あるくや泰山木の大き葉
にあふ

わが友の筏井嘉一屈(くくま)りて歌つくるけはひなりそ
こなふまじきを

吹きおろす松風の音を脊(そびら)にし佇(た)てるしばしの生(せい)
をたのしむ

たまたまに心放ちてはものを見ず紅(あか)き椿の花の
消(ゞ)のこる

一時期

郵便受あけてのぞけば音信(たより)あり心あつくしてわ
れのうけとる

あたたかき心こもれるわが友の葉書前におきう
たた寝をせり

五分五分にもの語りをればその人の形相荒きいらだちを見す

身の周圍一段高くとりすます傭人となりて事繼がむとす

小ぶとんを腰にあてがひ冷えぬやう祈りつつ眠る夜な夜なわれは

そことなく齒ぐき落ちくるわれとわがこの齒を待たず死にたく思ふ

墓穴と身のかかはりを忘れ去るてだては無しも生身のさびしさ

兩足を行火にあづけやきいもを食べてゐるわれは生甲斐のあり

見まはして心足らへり三疊のこのわが天地阻む
もののなく

おのがじしかくれて人の泣くといふうらさびし
さに堪へざらむとす

猜疑の眼のとどかぬところにて飯をたべむわが
希ひなれ障子を閉てつつ

繪にしたしむ二十少年が言ふことば主從の域を
超えてひびけり

持ち越せる身のさみしさに戸を閉すと夜眼にふ
と見れば菊そよぎをり

友よりのたよりとだえしこの頃の心さびしさ何
にしよらむや

さびしさに堪へて書を讀む傍らより絶えぬ思ひ
の湧きては身を搖る

あこがれし獨身生活に入りながらなほし心のみ
だるるはいかに

かみしめてわがうなだれぬ悲しみのわが身のう
ちを徹る思ひに

半ば厭ふわれの心よむちうてば黒一色となりて
たゆたふ

ものわびしさつのり來たればこのわれのやるせ
なきが如し事を構へつつ

十一月の寒さ身にしむ月夜道あゆみつつ思ふは
來し方のこと

辛かりし十六年の外にあり秋の夜途上に月を仰
ぐも

硝子戸にさす月かげのあはあはしき光を見つつ
眠らむとする

くづほれむ心のむたわが友の歌を誦しつつ或る
夜は保つ

あるほどの敬愛を人に捧げつつやがて逢はむと
あるはたのしき

仲秋の月中空にかかれるを折々にして仰ぎ見て
あり

日もすがら叩きに叩くちんどんやの鉦の音きけ
ば人間あはれなり

さくばくたる人生行路そが途上に生あるわれの
ひとりし息づく

おのづからささくれだちてひびあかぎれ多きわ
が手に春待つ切なり

歌に執す

半生を歌にかけしとわが言へば人ぞわれを見ぬ
顔振り向けて

人絹のよしなき風呂敷と人のいふそれを貰ひ來
て役立てむとす

父母もよろこべ生れてはじめてわが買ひし三圓
五十錢のこれは置床なり

愚かとはこれを言ふなりけりあはれわが歌に執
しては輕く扱はれぬ

野方圖に詠ひまくらんと思へるとき鍋釜の歌を
詠めとさとされにけり

わが名をばおかずと呼びてほめてやりぬわれと
わが名をおかずと呼びて

身も心もふらふらとなりし一瞬の思ひよりさめ
て茶碗を洗ふ

灼熱の念紙上に充ちたれば讀む者をしてしばし
ふらふらにせり

われすでに自身を思はず一念の火華となりて散
るを思へり

つくりかつ想ひつつ一生昏れむとすあなたどた
どし四十路過ぎたり

不義理の數わがよみあげて今日も空しつとめつ
くしつつあるは詩にのみ

衝・撃

思ひ設けぬ一撃にあひその前にたじろぐわれの
そも間が抜けたり

へつらはむわれかはとつとにへだてつつ人をう
やまへばなほし退るも

高く高くおのれを持してありがたきなやみの一
つ身をもてあぐむ

半ば信じ半ば疑ふ泥水にわれを浸せし者はこの
われと

さびしさの極まりぬればひとりゐの身を起しつ
つパン買ひて食ぶ

身をあげて人をほめつつうれしさの漲る心明日
につながむ

古きものにそむきて立てばおのづから支へ解か
れて身をもみにけり

波動

ひとりゆく道の邊にしてまぎれなき眞實心よも
ちあぐねたり

愚かしきわが信念に添ひゆくと孤獨のならひ堪
らへつつあり

紫陽花咲き夏に入る日の終日おちず生くる歎き
をふたたびしたり

符合ひはなれ考推し移れかすかなる歌よみの一
人とわれ老いむかも

うざうざとならべる歌を見るのみにてわが七月
のいのち細れり

たいくつなる思ひいたづらに繁ければものも言
ひ出ずこもりくらして

げつそりと鈍き感覺の前に立つわがひとりゐの
朝の寝ざめに

巧みなる人のしぐさのうらさびしく心にひびけ
われもいつはる

わがいのちわれ支ふるも易からずひとりに堪へて悔いなかるべし

生きあれば時代の波動のさけがたくひとりこもりて心たかぶる

時事に寄す

一

憐みをわれは乞はねば憐みを乞ふその人らにおくれたりけり

かへりみてもの言ふや友大痴なし巖の一角には
たくひさがるに

中絶えて高きあたりにつづき得ぬせまき島畑に
とり残されつ

不具なすものも容れつつこの島畑や地しばりぐ
さの茂るがままに

高きはも高き同志もの言ひあひつつせまき島畑
にわれらのうごめく

ことば尻の吟味にいのち捉はれつつ誇りかにあ
りと言へばさびしき

地しばりのゑらぎの聲す落ちかかる頭上の巖に
眼をやる刹那

つむじ風吹いて通ればとぐろまくへびかも暴れ
てわれへのたうつ

二

至れるもの至らぬものと共にあり時に忍従のわ
れを欺かす

眞實を語るたはけさ掌にのこる空しきものの象
さへなく

ひたひたと讀む身に寄せて假借なき言語はあは
れ君が吐きしもの

諸人のかくすましゐる圏内にいづち向きてかわ
が言問はむ

世に比なき大愚に戀ふれ道の端の大根といふを
數多く見し

蠅なき鳥にたとへて自らをさげすみをればわく
思ひあり

ひとり立ちゐるうらさびしさの沁む思ひ象なき
ものに憧れやまずも

相據り結ばば勁しと思ふわが希ひ徒らにして時
を過ぎたり

•

われを馳る因の一つとこれを言ふやたわいなき
人の唄に聽き入る

よる深くもの書き終へて息づくや地に委ねてま
た思はざる

國につづき世界の果てにつづく道の小なりとの
み詩を言はむや

女なるわが哭くなみだ洗はれてぬかづく方に君
の在します

衝撃はしばしばわれを大にせり現在も堪へつつ
ひしがれざりし

しばしばもかかるうたてさくり返し傍ら欲りぬ
尾ひれよたけはば

ゆくりなく苦しみをわれら分けあひてここに歌
詠む一團をなす

たけたかきロダンのことば餘りあるをわが身に
享(う)けてこの日幸(さち)あり

栗のいが

おそらくは表皮にふれつとおそひ來る手をはら
ひのけ直(ただ)に思へり

女一人潔く生きんとはじめより安き思ひはなか
りしいのち

やはやはと育ちし物に多勢をば頼める者にかか
はりのなし

ところさへ祕めてひそかに生きんとする生命制
すとや敷ける栗のいが

窮めあへずかつはつづりし文字の面見つつし戀
ふるおのが尾ひれに

毒汁をあびつつ歸りし夜更けにて止まるところ
このわが室に

秋

もくねんとひとりある夜に在り通ひもの思はす
る人もなかりし

踏みたへて放たぬ地歩やゆるぎなし淡きうれひ
の身にはまつはれ

秋の夜はこほろぎの音をききながらかもすうれ
ひにひた堪へにけり

うたた寝よりさめてふたたびものを讀むこの幸
の寂かなるかも

朝々の窓べに見らく死屍の群蟲の世界とのみ言
はむやも

踏まへつつ夜を明かしけむ大蜘蛛は犠の半ばを
はや喰ひつくしぬ

こほろぎと大蜘蛛の力へだてあり拉し來りて大
蜘蛛のくふ

おのづから穂に出でんとして直ぐ立てる高所の
朝の秋草なりき

雜

荒ぶる魂われやはらげむ女とぞ生れ來につつく
やしさおぼゆ

つながれてあへぐ生命を人の上に見つつすべな
し女といふもの

帝國

はし妻といふ名に呼ばれ人の前に性うるほふは
幸なるかな

その占めし座をば下らず男手に率ゐられつつあ
るは眼によし

個と個との相搏つ生活この世には果たし得ざり
しものと思はむ

想ひみる永き日にしてわが見しはまつはりあく
なき蔦かづらのとも

日を追ひて薄るる夢か虹のごと年月かけてわれ
に見えしを

知らずしてわれや假さんと言ひ出でし力は眞に
漲れるらし

人間のおのづからなる善さを持ち精根活きて働
く人か

人爲にはよらぬ響の音と思ふ唇をはなるるその
ことばさへ

北條民雄全集の讀後に

寢むとして仰ぐ夜空は月の暈まるく輪を描けり
心張り滿つ

生き拔きし意志の力か人間像日記を讀めばあり
ありと眼に

映畫「土」を觀て

人間生來のあたたかさをば描きたる節(たかし)が心のわれに通へり

ある時

なすべきはなしたりと思ふ今日にしてかかる思ひに身を灼くわれは

己(わ)が生命(いのち)の全きを心に期しながらもの言ふすべか歌詠む業(わざ)も

君がその折堪へ得しごとく堪へ得たりいのち生きんは易からなくに

在り様わびし

身に痛きことばと知りてくりかへす今日のおのれのすなほなるべし

憎みもちて言ひ放ちたる一語よし身に痛きから
に奮ひ起つめり

寄生木のさまなし生ひてわれの地歩みだれがち
なるを時に思へり

いづこにか根は下ろさむとつとめたりし言ひわ
けもあれど今はと默す

根づかずて生き様もなき庭樹々の在り様わびし
同類を怒らせて

事務室にて

生物の相寄るところ抗爭の絶えぬ理うべなはむとす

ペン執る手措きて見飽かぬ庭隅の八手葉あはれ人ならばよし

心熱の篤きたぎりと思へどもさへぎりてただに事務とるわれは

白紙に鄕土と書きて自らにひとり在る日になぐさまむとす

國と國たたかひ飽かずある時も一つ業ありてすがるはやすし

杳かに鬪ふ

仰向に寢て堪へ終せし涙とや絶え入るまでのわが思ひとや

切尖の鋭さに堪へてうけながすとひたすらにあれ情よみがへる

眉あげて堪ふべきわれのいのちかも夕かたまけてくづれむとする

わがねらふ心の臓はた壓しかへし鋭くも人の衝き來たるかも

かくしてや死鬪に近し人々の知らぬ歎きに今日を涙す

人々

義理わるきぶさたを敢てしたりけり逢はば心のみだるるを思ひ

秀づるやわれの腦裡に灼きつきて敬愛措かぬ一人なりけり

世に時めく地位や榮譽や金銀やへだて多きにわれは堪へてあり

力あり多くの人を依らしめておのれあくまで自在に世を渡る

朝ゆふべさへぎられつつわが見るはまだうら稚(おか)き人のいのちなり

歌よみのかずかずを措きて詩をつくる君に心(うら)戀へまま子のごとし

打ちあけてもの言ふ君がしたしさに馴れて落ちつくわが心にか

襖をばはたと閉して寄り來たれもの敎ふると本ひらきたり

人中にわれを迎へて佇める面影かなし幻(げん)となりつつ

春やいづこ

指一つふれなば悪の相なさむわが振舞よ保つべきなり

ばらの香を嘉(よみ)し中空(なかぞら)の月を仰ぐしぐさ幾たびころたもてり

混亂に身を導くは痴(こけ)の痴(こけ)とありひたすらにしも立ち働けり

春やいづこ身を魂をひきしめて木机によりもの書くわれは

庭前雨情

雨に明けし朝のよさは言ひながら心のつかへ解
きがたくして

庭前の紅き花らの眼を射るや誘はれてわがそこ
にしやがめる

松葉ぼたん雨降るけふは花閉ぢてつつましくゐ
たり棕櫚の木のもと

はばひろき葉蘭はもおのれぬれ光り柿の葉がお
とす雫をうけつつ

白晝夢

或る時夢を見たり。夢はあくまでも夢にして現實と相距る事遠し。すなはち省て、清淨無垢なる魂のなほあるありて、われを明日へ馳り立てる事實の前に涙ぐみつつ。

われよりもすぐれて人のゆたかなる仰ぎ見につつ結ばれてしを

おのづから身潔く生きて慕ひあふ魂の行手に翳なかりけり

相慕ふ二ついのちの翳らずもひそかには結ぶ天つ日のもと

交りは潔く清けしこの朝の光の中に俯しつつおもふ

時に處して自縄自縛を避けながら鑄型の中に入
るを好まず

この上の眞實なければゆるしつつ定規の外の世
にし生きたり

窮極は一人の行とまた言ひて業に執するや昨日
に同じ

むだ多く言はぬしぐさや冴えざえし抱きあげら
れてわれは宙にあり

時にあひかくもゆたかに愛されつつ育したてて
む鋭心をあはれ

いつぱいにわが眼見ひらき今は見ぬ人の面わの
いとしきかぎり

いち早く傍らを去るそれさへもいたはり合ひつつ生きむ希ひより

泉涸れてありしにはあらぬ女よと耳近く言へりし語やも顯ちくる

白晝夢その覺めぎはのかなしきにわれは伏しつつ起ちあがらずも

曉雨

正氣づくわれを嘉すと降る雨か曉かけて降る雨の音

笞の手須臾もゆるめず打ちおろせ何に怒るといふも愚かや

辱めの上超す恥の上塗りのことば知らねばただ
わらふなり

館山一子足蹴にされてまろぶよとわれ自らを見
据ゑて飽かなく

わがうちに汚濁かき立て伏しまろぶみにくさに
して曉近く覺む

曉を降りしく雨の音さびし報いと言ひて堪へて
わがあり

身にまつはる汚濁をわれとあつかひかね窓ごし
に見たり草の葉の青

夜蟬

ひとり寝る極樂境や外面にはまんまるき月の空
わたりつつ

月光に枝さし交す庭の樹のおぼぼしき影を振り
仰ぎ見つ

しかすがに月照る夜半の夏木立諸枝垂れては動
かざりけり

をしみつつ月にむかへば風鈴の寂かなる音のい
づこにか熄む

棕櫚の木の根もとに嫋とよりそひて立つ草見れ
ばわが眼うるむも

じじと鳴きて居所移す夜蟬かも耳衝くその音月の下びに

この崖に茂る小草の數知れぬ見上げてしばし言ふこともなし

柵

サルビヤの眞紅き花やさかりにて葉雜頭棕櫚の根もとにくづれし

梅の木におのれからみて實りける青きかぼちやを朝夕に見つ

天地の悠久性になぞらへて信ぜんとふと思ふなりけり

擁されて夜更けの柵を越えしこと轉換の代と共にありけり

動向

默々とわれら働く後方より物資窮乏のこゑあがりけり

新聞の文字の面にながめ入りこころ死をおもふかりそめならず

銃後の責め日ごろ重きにうち深く應(こた)へて言はず
業(ぱふ)にしたがふ

世の動向(うごき)とらへかねてはあへぐ日の誰(た)ぞわれに
來て眞ををしへよ

第二部

歸省

ふるさとの秋の月夜の豆畑聲ひきて鳴く地蟲ありけり

この月に向山邊の神の森ふかくかすみて影遠く見ゆ

わが村の小田のはてなる山かげにかくれて家居
見えぬ村かも

一つ咲き二つ咲きさく紅の庭のダリヤの十にあ
まりぬ

たちばなのぬれたる實より雫おちほとほとといふ音たてにけり

小松原下くさまじりつばらかに咲くや名知らぬ
紫の花

諸共に常なき生命もちて世にいつを別るる母か
と思へ

探しあてて來る蚊ありけりふるさとの宵闇にし
も佇みゐるに

竹の葉の散りしく路をふみつつも心戀しき山里に來て

竹藪のそばの校舍に人影見ず窓の下びに筍ほそし

葉山にて

鷄鳴きて夜明けをつぐる磯の村遠ぞく汽車の音のきこゆる

膳下げてゆきし女の入り來たりことばもなくて床敷きゆくも

海に來て見ぬ人もなき空ならむ白雲あまた浪に
向伏す

傍らに投網干す海人羨しくも老いてその身のす
こやかに見ゆ

潮がくりかつあらはれつ打見る磯のいはねの常
ぬれて見ゆ

荒磯のここのいはねにかきの殼貝がら白くつき
てはなれず

海風の寒きに向きて漁する海人あり遠くわれを
はなれつ

雜　一

佇みて久しきわれや朝の川邊に黑き鳥はも飛び
そめにけり

朝風に靑葉すがしくゆれてゐる寺の門すぎて路
をかへり來

立ちどまりふと仰ぎしに大き樹の葉はよ靑さは
やなし

傘もたぬ人もまじりて絹絲の細く降る雨を人は
通へり

下敷きとなりてさびしき小石あり敷きたての砂
利の路見てあれば

闇ながら落つる雫のありと知り歩みわが來る木
立の下を

青空をそがひになして樹は立てりかたつむりゐ
る一葉を見つも

さびしさに青空見るに眼鼻衝き流れんと來る涙
ありけり

手に取りて讀む書直にさしおきてまたもわがあ
るや涙わきくるに

わが思ふ人はこの世にいますゆゑわが涙はも落
つるなりけり

水の上の葵の地にはなれつつ根を持つあやふさ
生く世に持ちし

むらぎもの思ひ過ぎし心諾はず諾ふべかりしを
知るも

路を來て思ひ忘れし心あり思ひ忘れてうれしき
この夕

結婚前後

一日、人生の岐路に立ちて迷ふことあり。

かくのみに苦しきものと知らざりし生けるわが、
ために病みつつ

つかれ果てあらがふ力すでになきおのれなりけ
りまかせんとゐる

汝(いまし)より歌がかはゆしとかくさざるみ言(こと)をわがき
く賴む夫より

實家にて起居の折に、一首。

うつそみのさびしさ告げむ心もてこよひ來まさ
むわが夫を待つ

わが夫の歸り待ちつつこの夜(よる)を落居(おちゐ)かねたるお
のれにわびぬ

いさかひて二日とあらずかにかくに仲の直れば
またもいさかふ

眼に見てはこらへがたしと薄ぐらき廊下の中を
出でずわがをり

おのづから心はなれず父母のわれにありとし思
ふなりけり

震災の歌

叫び聲口よりいづる束の間を棚のものみな落ち
てまろべり

かねてわが話にきける大地震生命あらじと驚き
にけり

搖れうごく疊に立ちてわれ知らず手にとるふと
んかぶらむとしつ

するどくも澄める月かなまがつ火の燃ゆる悲し
きこよひの空に

わが夫はいづこにあるやわからねば妹をつれて
他人(よそびと)と逃ぐ

九月二日の夜巣鴨の宮様の原といふに宿る。
折柄鮮人騒ぎはげしく人々夜警に夜を徹す。

年弱の妹はげましわが夫と夕べの原に寢(い)ねんと
は來(こ)し

燒原を逃(のが)れ來りて露じめる大樹の下(もと)にわれら寢
にけり

をわい溜におちて泣きいづる子供あり夜を寢ぬ

人のざわめく原に

同行せる妹を別として、父母及び弟の消息不明のため一再ならず氣づかひありしが數日の後漸くその無事なりしを知る。

父母と一人の弟死にをらむ燒跡へわが夫をやるかな

淺草馬道の生家は隅田川と觀音堂との中間に位せり。震災前我等は下谷に借家しをりしが、燒け失せければ住む所もなし。折柄生家の燒跡へ父が建てたるバラックに誰もをらぬを幸、夫と共に暫くそこに住へり。未だ九月十日頃の事とて、四邊は大方燒け落ちしままなり。

燒野原黑くつづきて果て知らずたまたま昇る十五夜の月

假小屋を出でて佇む燒野原夕べ黑々見え渡るかな

假小屋を出で燒原にわが立ちてこの夕昇る月を
仰ぎぬ

立ち出でてひとり眺めつ空の月燒原見れば悲し
かりけり

川沿の街今はあらず見えざりし川の向うに白き
道見ゆ

向島地震後見ゆる川沿の道にぎやかに人の通へ
り

この度の死人を燒くとわがきけり絶えざるけむ
り空にあがれる

人々の亡骸あつめ骨に燒く仕事のあれど夫にさ
せむや

夫とわれ身の振方に困じつつただに悲しく坐り
たりけり

人足にならむとしけるわが夫とものゑることを
はじめて幾日

十月一日つひに赤痢となり、大久保病院の
バラック病舎に收容さる。

つぎつぎに生命(いのち)を落とす人幾人同じ病(やまひ)にわれも
臥したり

おのづから苦しみもがく病人の額(ぬか)に玉なす汗う
かびたり

その額(ぬか)に湧きしままなる玉の汗苦しみもがきつ
ひに逝きし人

眞夜中を來し看護婦に何言ひし病のやまにわれはありつつ

來る時を一つ自動車に乘りて來し若き男は癒えで死にける

しかすがに病嵩じて死ぬ人を朝夕見つつわれはなほりぬ

早春

一夜、近火にあひ危く災を免れて。

薄ぐらきらふそく點しゐる夜のさびしさ超えてもの凄くあり

生命だにあらばと思へうつそみの心粉にして得し物のあり

本郷菊坂にて

薄みどりほのかに染めて花ならむ紅しと思ふに
向うの木の梢

谷へだて見ゆる木梢をわが見たり薄みどり葉よ
ほの赤き花

春

上野山上の鐘楼にて

若葉せる楓の上枝　雀子のとまりはなるる　呆
としてわが見てあれば　傍らの見知らぬ人も
その先の老松ケ枝を連れとたたへつ

呆(ほう)として春の氣色に見とれゐるわが身に近く小
鳥あそべり

初夏

自(し)が家に入らむとしては　入らずしも佇むわれ
よ　初夏の星しげき夜の　み空ゆくま白き雲に
眼をばやりつつ

夕(ゆう)しばし打ち臥してありおのづから眠りつわれ
は眼ざめけるかも

飼猫の上さまざまに推しはかりいとまもあらぬ
世話やきにけり

不忍池の此方より

不忍の池中に立てる　辨天の樓門さして　しき

りにも行き交ふ人の　まばらなる木立のひまに
見えかくれ動ける影は杳かにし見ゆ

まばらなる木立のひまに小止みなく動ける人影
つきむともせず

はるかなる人の動きのひまに見ゆ二人の人の鎚
振れるさま

眞夏の頃

疲れたる身を休めたさろくろくにものをも言はず打ち臥してあり

小さなる花にはあれど一日一日咲き替る花の色はあざやか

わが庭の草の伸びしを大聲にたたふる人よ隣の主人

小さなる苗植ゑしことを思ふかな丈高き草見るそのたびに

いつ咲かむ草の花ぞと思ひゐし花は大きく咲き出でにけり

打ち坐り本讀みをれど氷水欲しと心は思ひゐにけり

夕方を涼しくあらむ草生ひし原つばの中に坐りゐる子ら

飼猫の死

猫死にて今は用なき皿茶碗朝戸をくれば置かれてありけり

猫よ猫よ猫よと呼ばむ心もて用事なしつつゐるわが心

飼猫の死ねるばかりと落ちつきてありけるわれの心はみだれぬ

小さなる猫もやゐると下向けど猫はもをらず死に亡せしけふ

言ふことのなきに默せる二人かも小さき猫は死に亡せてあらず

後日飼ひしもまた脆く死に亡せけり。

限りなきさびしさにありわが心かへらぬ猫の生命を思ふ

雜　二

滑らかに肌あるものを好むといふ人をわが見れば常よごれたり

自が家の修繕するを厭ひゐる人をすべなみ見つつわがをり

日に幾度するあきらめぞあきらめて暮すと思ふ心の下より

洋服のまとめを内職とするわれの肩凝りやすくをりをり休む

起き出でて間もなきわれはぼんやりとかまどの下をたきつけてあり

横伏しにころび伏したるアラセイトウ起しやら
むも飯焚き終へて

黄楊の木の外れて木片多く出ぬ薪にせんと思ひ
干しつつ

黄楊の木の當り外れて落ちつかぬ心は常にゆら
ぎつつあり

あかねさす日を二人ありおのもおのも心一事に
打ち凝らしつつも

われとわが歌の良し悪しわかり來て心に更らに
師を思ひたり

遠くゐて思ふ心を人知るや知らずやわれはもの
を縫ひをり

うつむきてものを縫ひをり今日の日の暮るるを
知らず空をわが見ず

家のきまり少しもつかぬうれたさに働かんわれ
と思ふなりけり

思はれてある身にあらむままならぬ心おぼえつ
つ久しかりけり

思はれてありやは知らず八手葉に對ひままなら
ぬ身をばなげきぬ

わが夫の腕の中なる犬の子のきゆうくつげにも
尾をば打ち振る

犬の名をわれ呼びながらこの朝の久しくも掃か
ぬ庭はきにけり

都にし在ればゐ戀しきふるさとの野山に草の花咲
きて見ゆ

來るといふ人を待ちつついそがしきわが身は垢
にまみれたりけり

何ゆゑと知らね涙の流れつつありさびしきわが
この身より

むらぎもの心のうれひ募り來て堪へがたき日や
天地に賴る

天地をわが思ふ時すなほなる心となりて人にも
仕へぬ

憧憬

おのづから瞳をあげて空を見る憧れ心なしといはなく

胸の中に憧れ宿しすなほにも日夜あるわれとひとりし思ふ

心のみ燃えつつあれど手はふれず言にもわれはいふと思はぬ

これはわが憧れ心　人に言ふ心ならずと　ひそかにも胸にたもてり　憧れ心

ひよつとして思ひあがれどまた元にかへる心かいくほどもなく

心沈める頃

いかにせんさまざまのことをして見れどこの頃
のわが心などまず

親思ふわれの心の荒むにも荒みかねつつ涙おと
せり

ほのかにも人恐ろしむわが心持つとは言はねあ
る心地する

いささかの疵にはあれど負はせける人と思ふに
つれなくわがせし

厨邊に伸びし八手をわが見つつその葉へだてて
人と語れり

心をば言はで暮しつ春深き庭に木の葉の伸びしをば見る

・

末知れぬこの世の中におびえつつ何事もわがなし得ざりけり

亡祖父を憶ふ

ふるさとの林の奥の墓の裡になきがら埋めし祖父在りと思ふ

美しき花見する樹を何思ひ生前の祖父の伐りすてにけむ

この畫のひる餉の膳もかたづけず亡き祖父われ
はおもひゐるなり

おぼぼしや降る雨の音にさへぎられ身の動きに
も消ゆる幻影

年々實のこぼれてや、一所に茂り
かつ花咲くコスモスを見て。

ふるさとの納屋の軒に　年年に草はも茂れ　そ
の小草移し植ゑける　わが祖父は佛となりて
もはや五年

雜　三

わがものと呼びつつ人を死なしめむ希ひかたみに持ちてありきや

向き向きに寢つつもけんくわなしつつも夫婦と思ふ氣安さにあり

皮肉言ひわらひあひなどしつつゐていとしみあはむ心もあらず

相馴れて今は氣心もよく知れるわれら二人ぞかく暮しをり

たらちねのわが親きやうだい他人も信ぜんとせず惡るくのみ言ひて

たらちねの親もうからも他人(よそびと)も解き得ぬ心深き
をわが知る

年の瀬の支出にたへむひたごころ門松さへも控
へて立てず

破れたる疊に紙をはるはわれ頑固一徹の夫はか
まはず

朝々の霜の雫の　滴りてふとんぬらすなり　は
やはや　起きてたまはれと人を起しをり

天井のなきはともかく店さきの疊の痛くやぶれ
しわが家

落ちつきて人は寢てあり霜どけの雫おち來る朝
のふとんに

悲しみてありと思はぬわが眼より涙の湧きて笑
はせにけり

信念を持ちてしわれはおどろかず寝(い)ねつつ人の
どなれるそばに

このわれの私情(こころ)にはあらずその人の口もてつひ
に言はしめにけり

絶え間なく降りくる雪のおもしろさ愉快にある、
と仕事場の人

ねむたきわがこの眼(まなこ)　疲れたるわがこの身をば
つぶりて寝(い)ねん思ひ　横たへて寝(い)ねん思ひ

春の夜　わがよろこべり　寢を前にして

やうやくに寢ぬる運びとわがなして寢ぬる今夜
したのしかりけり

雜　四

いさかひの多くは我欲の　滿たされぬためにあ
りけり　悲しもよ人間われ　隣人を愛さむとし
て　愛し得ぬなやみを日々に　なやみつつも我
欲につながり生きてゐむとは

ある時、肉身のため身を起して、人の家に
しばしば足を運ぶ事あり。

ことわり言(ごと)ききての後(のち)の恨めしき思ひにわれは
浸らむとしき

弟よ強くしあれと念じつつ念じつつゐるものわ
が利己心か

イプセンの戯曲集を讀みて、一首。

眞實を言へば世間がせまくなりすなはち身さへ
ほろぶといふなり

障子のうちにもの思ひつつうつけゐてわれは魚
を盗まれにけり

道の上にシヤベル動かすわが同胞は額にしげき
汗ぬぐひたり

女の美保つによしなき各々の今日の生活に思ひ
至りぬ

とりがたきとくいとりたりとよろこべど深く思
へばともぐひの世ぞ

堪へ堪へてはたらくわれの魂の棲家とりこぼち
人薄わらふ

はたらくがきらひな人と年永く共に暮してあぐ
ねし心

何のため櫛うりひさぐわれならむかく思ひつつ
泣かんとしたり

無題

一

身の不運歎かむとして止めにけりわればかり世
に喘ぐならぬを

中途にて負けしさびしさおほよその人のそしりを身にはあびつつ

わがために苦しむ人らを眼に見つつ木石のごとく默し生きたり

堪へかねて自殺する人の多しといふ際にわれありと思ふさびしさ

ひたすらに木の實は元と詑び入れる弟見れば在りて報いたき

わが性の何者なるかを突きとめてやがて落ちつく心もありぬ

わが眼(まなこ)しばたたく間の出來事と過ぎし動作よ心
搏ちにけり

このわれを抑へし者の外(ほか)になくわが悲しみを知
る者はなし

かくばかり心離れしと思ふとき涙いちはやく眼
を浸しくる

言(こと)にしていはぬ心は言ひわけは見えぬ笞(しもと)となり
てわを打つ

つひにして身にかへり來る憤り秋深き今日を奮
ひ起たんとす